石川県立埋蔵文化財センター年報第３号別刷

内浦町宮犬ゴショ山古墳発掘調査報告
珠洲市谷崎横穴群(第5号~第11号)発掘調査報告

1983．3

石川県立埋蔵文化財センター

内浦町宮犬ゴショ山古墳発掘調査報告

例　　言

1　本編は昭和55年度県営総合農地開発事業内浦地区宮犬工区畑地整備事業に伴う珠洲郡内浦町宮犬ゴショ山古墳の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は昭和56年12月21日～22日にかけて石川県立埋蔵文化財センターが実施し、西野秀和・浜野伸雄・福島正実（以上主事）、平田天秋（保存技術係長）が担当した。

3　発掘調査には次の諸氏の御教示を受けた。（敬称略）

坂下喜久治（白丸小学校教諭・石川考古学研究会々員）馬場　宏（石川考古学研究会々員）内浦町教育委員会

4　発掘調査にあたっては、地元の中村みつい、堂前つぎ、升谷いさ、時山正章氏の協力を得た。

5　本編の執筆・編集は上記発掘担当者の助言を得て平田が担当した。

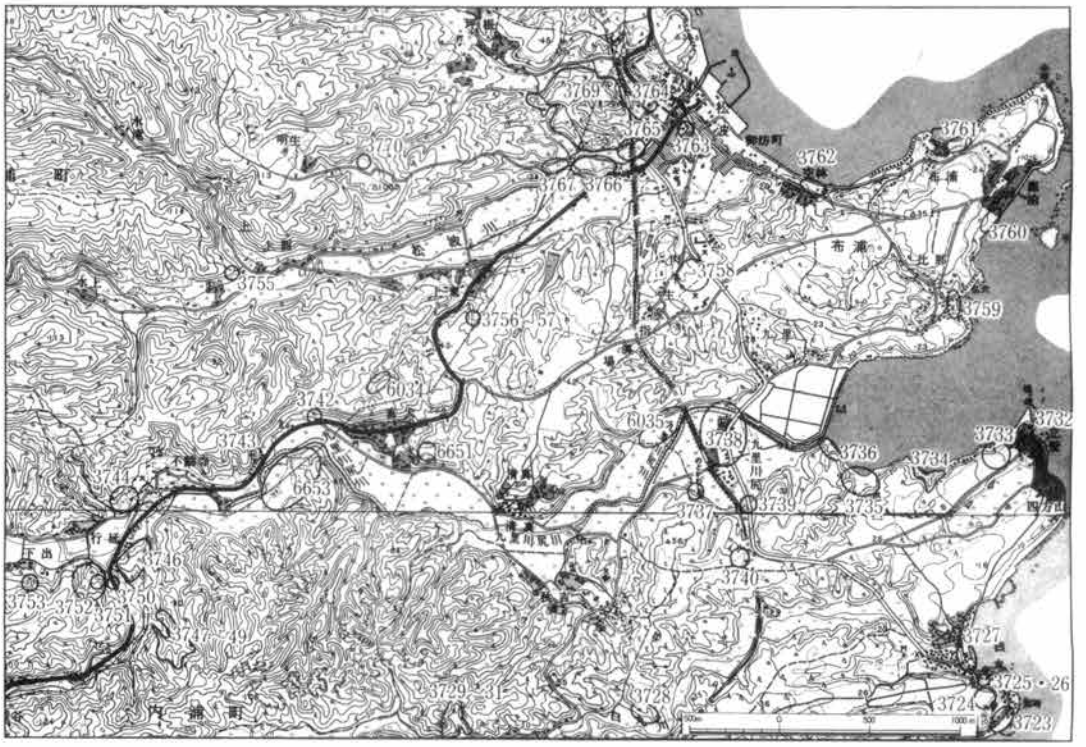
6　本古墳の出土遺物および諸記録は、当センターが一括して保存管理にあたっている。

目　　次

1　位置と環境……20
2　調査に至る経緯……21
3　調査の概要……23
4　出土遺物……23
5　おわりに……24

1　位置と環境

九里川尻川を約2.5㎞遡上した左岸通称ゴショ山（ゴシャ山）に所在する。宮犬集落の東側の山地にあたり、また真言宗弥勒院の背後にあたる。平安時代の天部形立像4軀と地蔵形立像1軀を安置する大師堂の東約20ｍの距離にある。この大師堂は旧五社権現社であり、ゴショ山の呼名もこの所から来ているものと思われる。また、本墳はゴショ山の山頂をやや下った北側斜面に所在し、その前方北側約200ｍに国道249号線が走っている。九里川尻川は、内浦町最大の規模を有し、本河川により沖積平地が広がっている。下流域では、川尻製塩遺跡群が山裾部に点在しており、かなり内陸部まで海岸線が入りこんでいたことが伺える。本墳の周辺九里川尻川中流域では、北西約800ｍに平安時代の宮犬窯跡（須恵器窯）、東側約5～600ｍには縄文時代の宮犬遺跡、不動寺遺跡が、また近年発見された古墳～奈良・平安時代に属する宮犬土師遺跡がある。前面には、



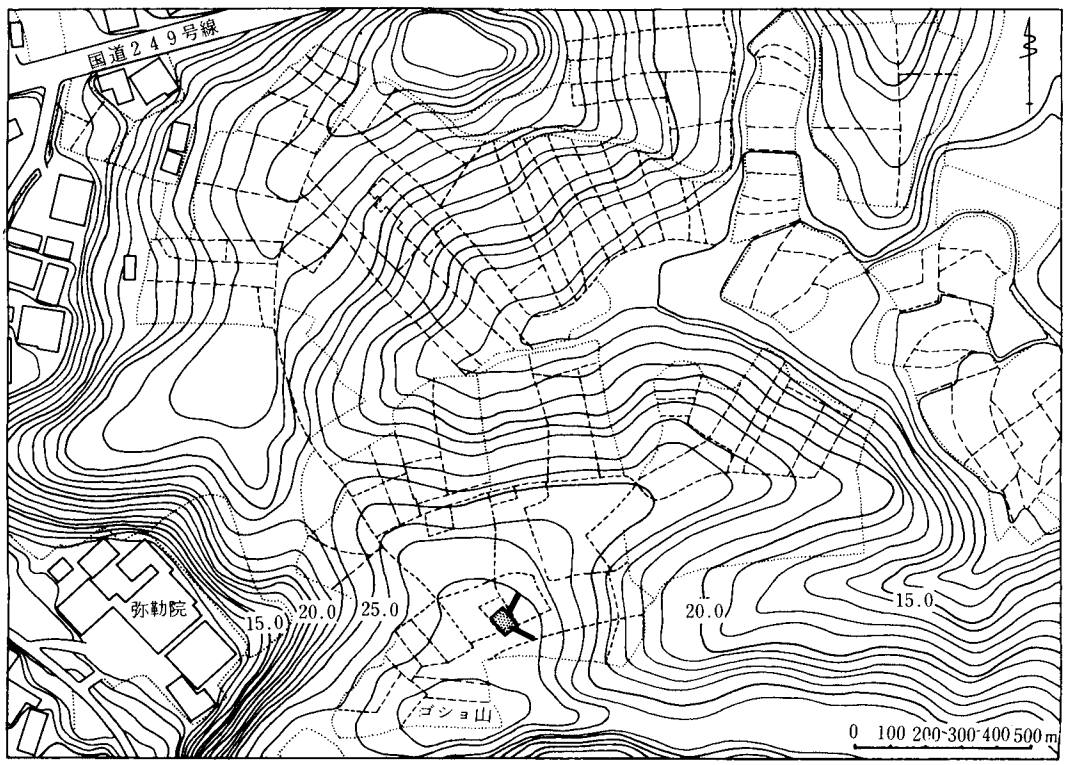
第1図　周辺の遺跡　国土地理院「松波」「宇出津」

6651	**宮犬ゴショ山古墳**				
6653	宮犬遺跡	3738	川尻Ｅ遺跡	3756・57	上遺跡（Ⅱ・Ⅲ）
3723	白丸下出遺跡	3739	〃　Ｄ遺跡	3758	松波農場遺跡
3724	白丸小学校遺跡	3740	川尻遺跡	3759	比那遺跡
3725・26	白丸遺跡（Ⅰ・Ⅱ）	3742	宮犬遺跡	3760	鹿泊遺跡
3727	白丸向出遺跡	3743	不動寺遺跡	3761	布浦遺跡
3728	河ケ谷ミソメ窯跡	3744	不動寺トクミチ遺跡	3762	空林遺跡
3729～31	河ケ谷ヤシキダ窯跡	3746	背継城跡	3763	松波海岸遺跡
3732	立壁城跡	3747～49	行延窯跡	3764	松波滝波遺跡
3733	立壁遺跡	3750	行延遺跡	3765	松波遺跡
3734	立壁製塩遺跡	3751	古蔵坊遺跡	3766	松波上出遺跡
3735	川尻Ａ遺跡	3752	青竜寺跡	3767	内浦上遺跡
3736	〃　Ｂ遺跡	3753	時長中世墓	3769	松波城跡
3737	〃　Ｃ遺跡	3755	上遺跡（Ⅰ）	3034	宮犬窯跡

九里川尻川沿に広がる平地から入り込む浅い谷があり畑地として利用され、さらにその下方は谷水田として利用されている。また、ゴショ山から東に続く通称コウジンヤマに至る間に直径約7m、高さ1.5m程度の円墳状をなす隆起がある。外形のみの判断であるが、古墳の可能性もある。

2　調査に至る経緯

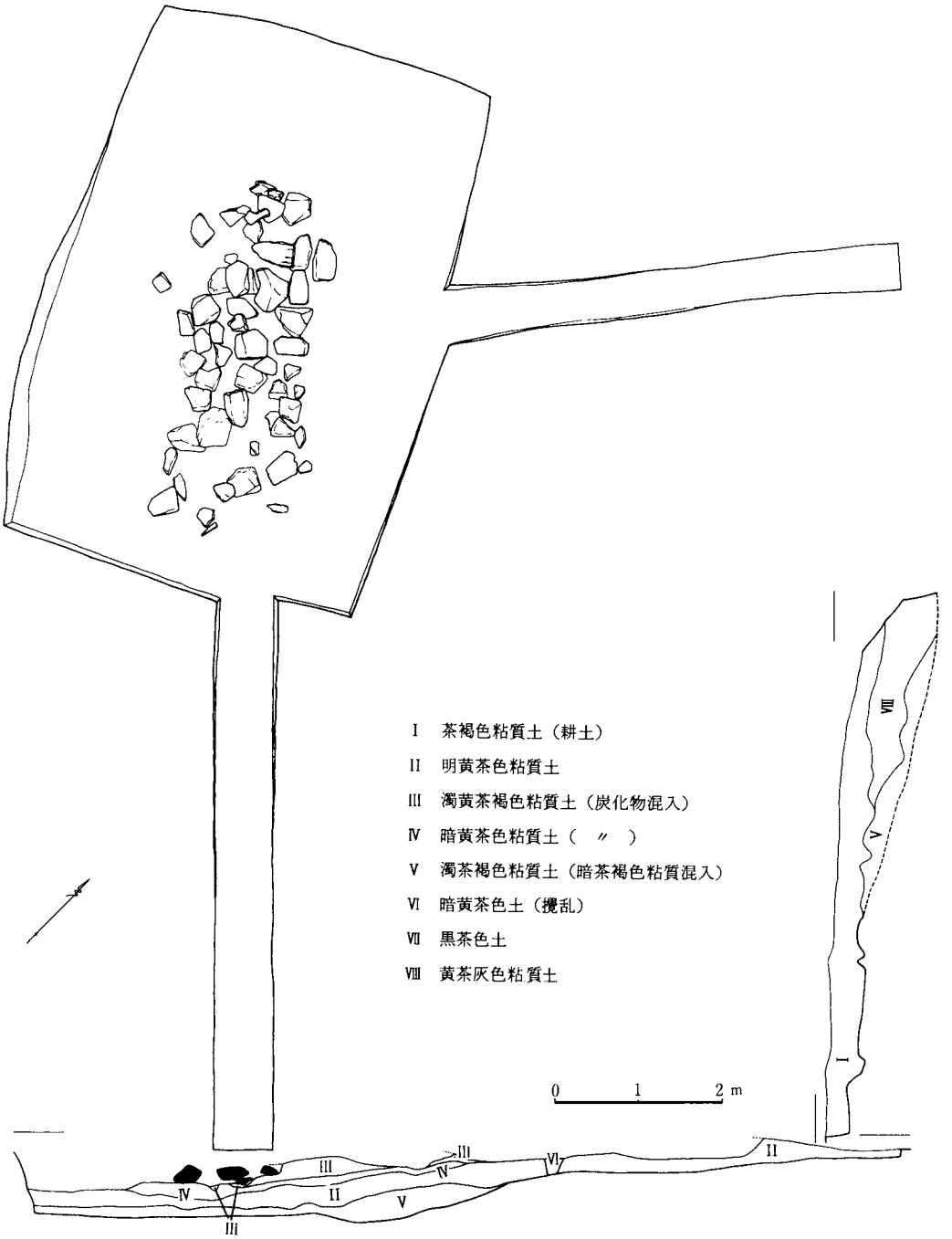
昭和55年度県営総合農地開発事業内浦地区宮犬工区畑地整備工事実施中に、地元在住の石川考古学研究会々員の坂下喜久治氏により、同年12月6日に発見されたものである。同氏により内浦町教育委員会に通報、同月8日に石川考古学研究会々員中野錬次郎、馬場　宏、四柳嘉章、山田芳和氏、同町教委、県立埋蔵文化財センターの三者による現地確認を行った。重機により削平され、天井石と思われる石材三個は、かなり移動していた。また石室材と思われるものは、ほぼ現位置を保ち長方形の箱形状に並らぶように見られた。また、上記の天井石と思われる石材に付着して須恵器蓋の破片、削平土に混じって須恵器甕の破片も採集された。以上のような状況により、古墳の可能性が強いとの意見が多く出された。その結果を受けて事業主体の石川県耕地建設課（担当　珠洲土地改良事務所）と協議し、工事を一時ストップすることとした。その後、数回の協議を重ね、冬期間の調査は困難なため春を待って、確認調査と現状復元を行なうこととなった。また、現地での保存と復元、郷土学習資料としての利用を心良く提案されたのは、発見者であり土地所有者の坂下氏であった。一方、担当の土地改良事務所も地元協議を重ね当該地区を工事計画区域からはずして、旧畑地に復旧する決定をした。以上の事柄をふまえ、昭和56年12月20日から23日まで、確認調査と復元作業を実施した。



第2図　周辺の地形と調査地点

12月21日(月)　晴　重機により削平された残土の除去作業とあわせて、山頂部方向にトレンチを設定し調査を進める。周辺の整掃後、現状の写真撮影、平面図の作製、トレンチ土層断面の測図を行なう。珠洲郷土史研究会の中野錬次郎、和嶋俊二、間谷庄太郎、浅田量治各氏の見学があった

12月22日(火)　晴　工事により移動した天井石を重機により元の位置と推定される場所へ移設復



第3図　調査区全体図

元を行なう。また、石室周囲も雨水の浸透を防ぐため盛土をする。それ以後に、地主の坂下喜久治氏の厚意により石室周囲に、モチノ木、サツキ、キンモクセイの植栽を実施していただいた。将来、樹木の成長に伴ない良き古墳公園になるものと期待される。

3　調査の概要

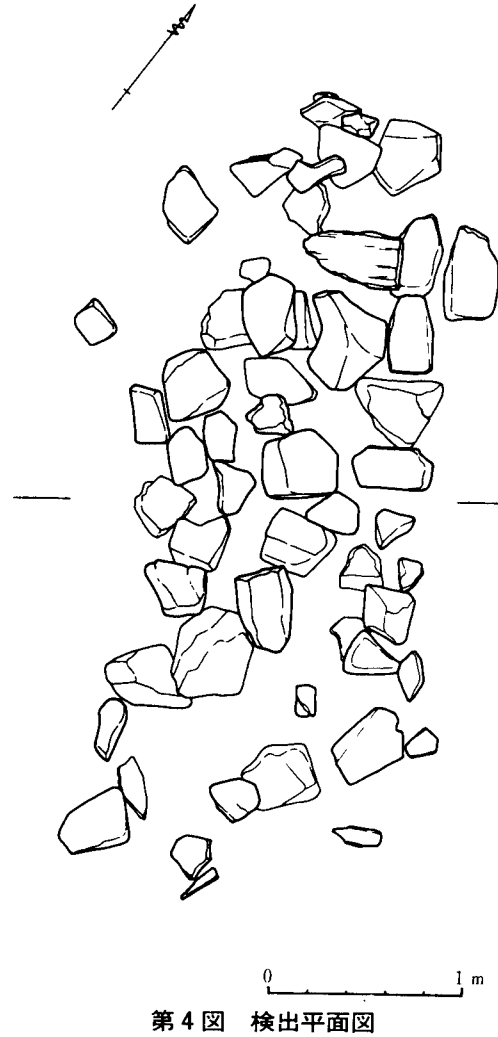
幅80cm長さ200cmの長方形状に敷きつめられた河原石群を検出した。それらは、ほぼ40×50cm大のもので中には厚さ1～2cmの板状石もまじっている。また、北東約4kmの赤崎海岸に認められる自然礫（安山岩）も⅓程度まじっている。天井石と思われる三個のものは、1は170×150×35cm、2は140×130×25cm、3は120×70×30cm大のものである。1と2は同質のものであり3はそれらよりはやや硬めのものである。この配石には掘り方等は伴なわず配石間に入り込んだ土は削平の際に入り込んだものである。配石のある地点は、地山線の最も下った鞍部の部分にあたっている。これら配石は、削平の際に移動しており旧状を伺えるものは皆無と思われた。また、この配石は、地形的にみても古くに解体され投棄されたものと推定される。また、南、東側にトレンチを設定して調査を進めたが、周溝等付属施設の検出はなかった。遺物は全て配石内において検出されたものである。

4　出土遺物

発見時に、山田芳和氏により採集された須恵器蓋片、甕胴部片各一点は「内浦町史」第一巻に谷内尾晋司氏が報告済みであるので省くが、同一個体になる可能性もある。今回の調査により検出されたものには、須恵器蓋片4片（2個体分）、坏片5片（3個体分）、甕片7片（2個体分）、一方土師器では、30片（3個体分）があった。

須恵器

i　蓋（第5図1、2）　1は、口径11.0cm、器高3.0cmを測る⅔片である。やや小形の扁平な宝珠形のつまみを有するもので、天井部⅓程度は篦削りがされ、その他はすべて横ナデであるが、内面見込の部分では異方向の横ナデ（仕上ナデ）を施している。内面では、降灰釉がみられる。胎土には、やや砂粒を含み、焼成は良好で、暗灰青色を呈する。2は、口径11.2cmに復元できるものである。天井部の½程度は篦削りがなされ、その他は全て横ナデで、さらに見込部分にも異方向のナデが認められる。身受けの返しは、1より2の方



第4図　検出平面図

が、シャープである。胎土には、やや砂粒を含み、焼成は良く、暗灰青色を呈する。内面に自然釉が認められる。

ii　坏身（第5図3～5）　3は、口径10.0cm、器高3.5cmを測る⅔片である。底部は篦切り離しのままで、腰部から底部にかけては篦削りが施され他は全て横ナデで内面見込み部分にはさらに異方向のナデを施している。胎土は、やや砂粒を含み、焼成は良好であるが、断面内面に赤茶褐色を呈する部分が帯状に認められ、暗灰青色を呈する。3は、口径11.0cm、器高3.5cmに復元できるものである。胎土には、やや3よりは砂粒を多く含む点を除けば同様である。4は、胴部から底部にかけての破片である。底部は篦切り離しのままで、腰部では篦削りを施し他は全て横ナデで、内面見込み部分には異方向のナデが認められる。また、底部には篦先による刻文がある。胎土には、やや砂粒を含み、焼成は良好であるが、断面内部では茶褐色を呈し、器表は暗灰青色を呈する。

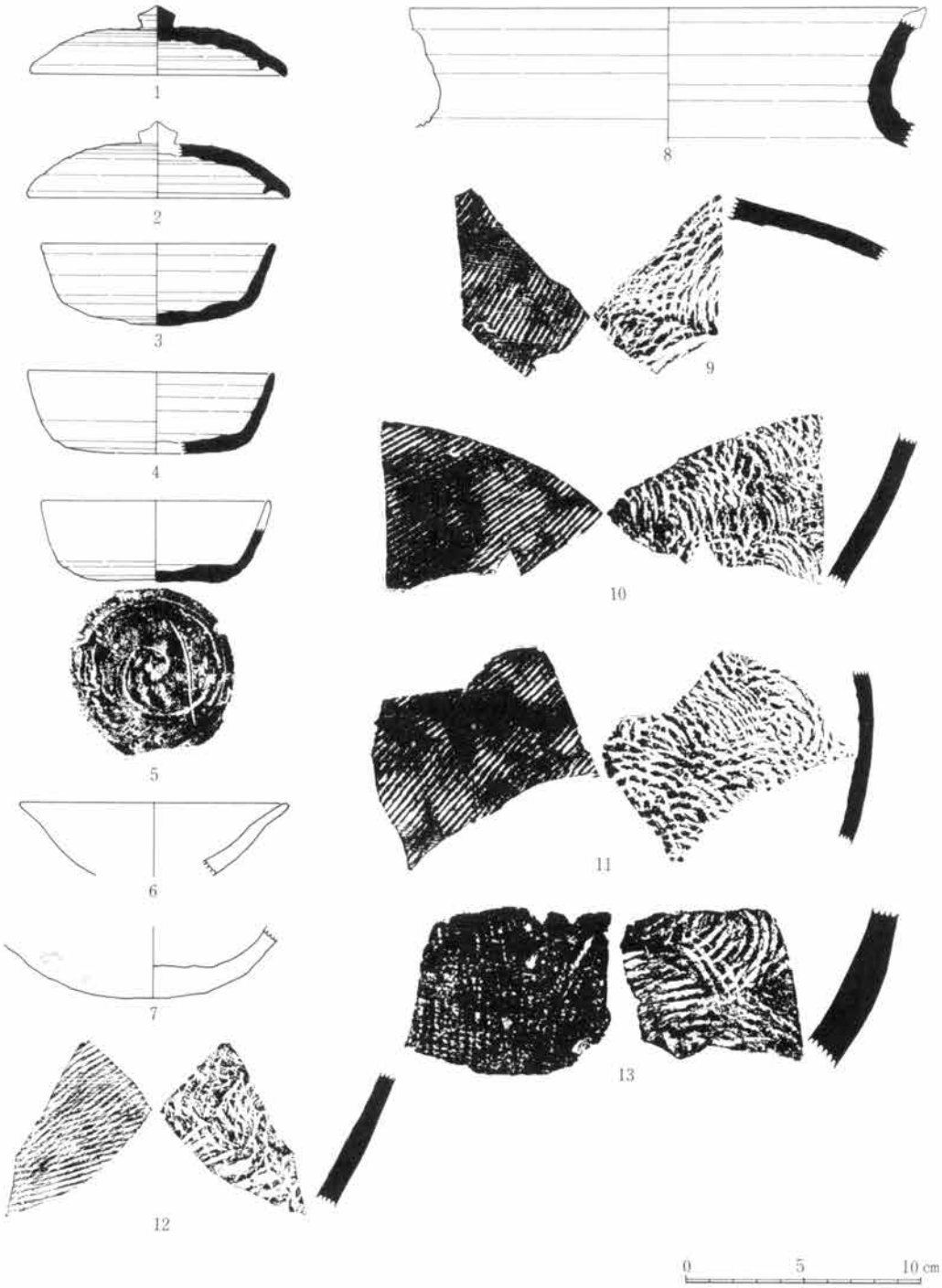
iii　甕（第5図8～13）　8は、口頸部の破片であるが、口縁端を欠失するが、口径約22.4cmに復元できるものである。内外面ともに横ナデであるが、胴部ではタタキが施されるようである。頸部内面と肩部に自然釉が認められる。胎土は精選され、焼成は良好で、灰青色を呈する。他は、全て甕の胴部片であるが、9～12は同一個体とみられまた8の口頸部とも同一個体となる可能性がある。器壁も全体に薄く、焼成も良い。13は、同じく甕胴部の底部近くの破片であるが、焼成はあまく灰白色を呈する。

土師器（第5図6、7）　6は、口径11.5cmを測り、坏形をなすものと思われる。体部はゆるやかにのび、⅓上位で屈曲して口縁にいたるものであるが、底部は丸底をなすものと思われる。器表には指頭圧痕が認められるが、二次調整（手法不明）でわずかに痕跡を残すのみである。胎土は脆く黄褐色を呈する。7は、甕か壺の底部片とみられる。底部は、丸底をなし篦削りが施される。内面では、指頭圧痕（手捏痕？）が認められるが、二次調整（手法不明）によりわずかに痕跡を残すのみである。内面には黒斑が認められる。胎土には、小石（径2～3mm）をやや含むが緻密であり茶褐色を呈する。土師器では、図化できないが、坏一個体があり、他にもう一個体分の器種不明のものがある。

以上、これらの遺物は少量であるが、七世紀前半から中葉にかけてのものと見て差しつかえないものであろう。

5　おわりに

構造については、かなり古くに移動を受けており旧状（構造）については知るよしもない。が遺物、石材からして古墳の所在した可能性は動かし難い。残存する石材が全てと思われ、これらから復元してみると三個の天井石を架したとして、最長でも350cm、最大巾で150cmをうわまわることはない。石材の数量から類推すると二段三段に積み重ねることはできず、一段分程度の数量しか存しない。規模についても長さ200cm、巾80～100cm程度の室しか設けられない。以上のような状況から類推するに箱形石棺状の室に天井石を構架したものと思われる。しかし、小規模な横穴式石室墳の可能性も捨て切れてはいない。この場合には、他の積石は今回の調査範囲外に存することになる。ところで本町においては、高塚古墳は皆無で空白の地帯であった。富山湾に面す



第５図　出土遺物実測図

る周辺地区の珠洲市、能都町では古くから高塚古墳が知られている。珠洲市宝立町磐若川に面する大畠古墳群（横穴式石室、４基)、同市上戸町竹中川に面する永禅寺古墳群（箱形石棺、６基以上)、また近年の古墳群の分布調査により発見された若山川流域の上戸大池古墳群（４基以上)、上戸陣ケ平古墳群（５基以上)、野々江ミョウケン山古墳群（５基以上)、経念古墳群(10基以上)などがあり、また能都町では七見いずがま古墳（６Ｃ末～７Ｃ前半、１基）が知られている。また、横穴古墳は珠洲市域で200基を超す分布がみられる。能都町、内浦町、珠洲市と言った富山湾に面する同一地域にあって能都町、内浦町に各一基と珠洲市域については別として非常に少ないと言える。能都町、内浦町をみると平野部（可耕地）が非常に少なく、これら墳墓の被葬者については農耕を基盤としたものとだけとは理解しにくい。七見いずがま古墳については、報告者（四柳嘉章氏）は、立地として臨海型をあげ、また周辺の製塩遺跡の存することから製塩(漁業)集団をも包括した農業共同体の有力家父長層を想定されている。本墳の場合についてみても、九里川尻川流域は現在、本町においては最大規模の可耕地を有する地域と言える。しかし、当時においては、製塩遺跡の分布からみても海岸線がかなり内陸部まで入り込んでいたと考えられる。以上のことがらを総合的にみると九里川尻川流域を統括し、また製塩（漁業）従業者集団をも統べる農業共同体の有力家父長層の影像が、うかびあがってくる。また、周辺の墓制からもまた営造時期等の関連からも箱形石棺とすることはやや困難で、やはり小規模な横穴式石室墳を考えた方がより妥当と思われる。

最後に、終始お世話になった坂下喜久治氏はじめ地元の馬場　宏、中野錬次郎、和嶋俊二、浅田量治氏、内浦町教育委員会に記してお礼申し上げます。

珠洲市谷崎横穴群(第5号～第11号)発掘調査報告

例　　言

1　本編は一般国道249号線災害復旧工事（56災628号、道路災害復旧工事）に係る、珠洲市宝立町春日野イの部1の1に所在する、谷崎第5号～第11号横穴の緊急発掘調査報告書である。

2　調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

(1)　調査期間　昭和57年3月29日～同年3月31日

(2)　調査担当者　平田天秋（保存技術係長）、西野秀和（主事）、米沢義光(同)、福島正実(同)、浜野伸雄（同）、垣田修児（同）、越坂一也（同）

3　本編の作製は調査担当者、センター職員の助言をもとに福島が行った。

4　報告書作製にあたり、中野錬次郎氏（当センター保護普及委員）より採集資料の提供を受けるなど協力を得た。

5　横穴各部の名称は『石川県珠洲市史』第1巻に準拠した。また各横穴の実測図は1/50とし、市史と統一を図った。なお方位は第1・3図を除き、本文記載分も含め磁北を示す。

1　調査の経緯

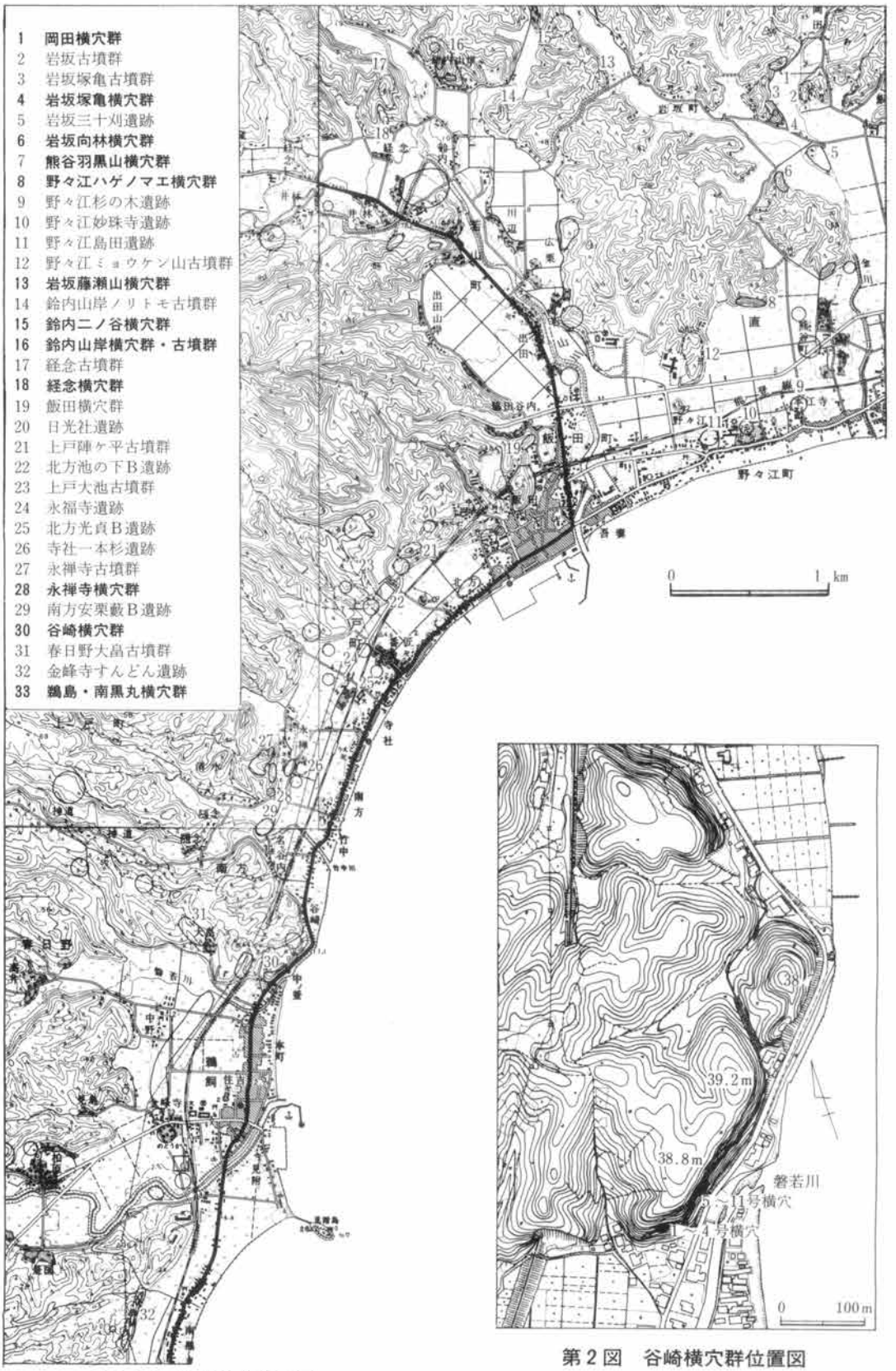
1981年6月28日、能登地方を中心に襲った集中豪雨によって、珠洲市宝立町春日野地内通称谷崎で国道249号線法面が崩壊した。同国道は約1日不通となった後仮復旧した。その後、翌82年3月中旬に至り、同所で復旧工事が行なわれ、新たに切り崩した崖面に横穴状の掘り込みが7箇所前後露呈していることが明らかになった。

センターでは、これらが谷崎横穴群の一部である可能性が高いと判断し、工事主体である県珠洲土木事務所に照会し、横穴周辺の工事を一時中断し現状を保つよう要請し、今後の対応について協議がなされた。当初、土木事務所は、工事区域が埋蔵文化財包蔵地の範囲外と思われたこと、災害復旧事業であり緊急性を帯びるものである点を強調したが、本工事区域は県遺跡地図に表示された周知の遺跡の範囲とは微妙な位置であって、従前より、協議の対象としている点、および工事開始まで8ヶ月以上が経過しており、対処が十分可能であったことを指摘、協議の結果1982年3月29日から3月31日にかけて発掘調査を実施することとなった。また調査後は開口部はモルタル吹付工により閉塞されるため、塩ビ管を埋め込み所在地点を表示することとした。

調査は担当者の安全確保の面から7基すべての計測は断念し、玄室内で作業可能な4基の計測を実施した。

2　位置と環境

能登半島の先端に位置する珠洲市は、金沢市より約150km、国鉄で3時間を要する距離にある。奥能登は低山性の小起伏山地と丘陵地が大部分を占め、前者は北側（外浦）後者は南側（内浦）に偏在する。また本市内浦側海岸部には海岸段丘が発達している。一方、海岸平野は内浦側正院町から鵜飼町にかけて、金川、若山川、鵜飼川等によって形成されているが、規模は狭小である。[1]



第1図　周辺遺跡分布図

第2図　谷崎横穴群位置図

谷崎横穴群は珠洲市街地の南西約３km、宝立町春日野に所在し、上記海岸平野のうち、南端の鵜飼地区を遮るように海岸に突出した段丘崖に立地する。各横穴は段丘を形成する飯塚珪藻泥岩層に穿たれており、珠洲地域に分布する各横穴群はほとんどが本層を利用している。

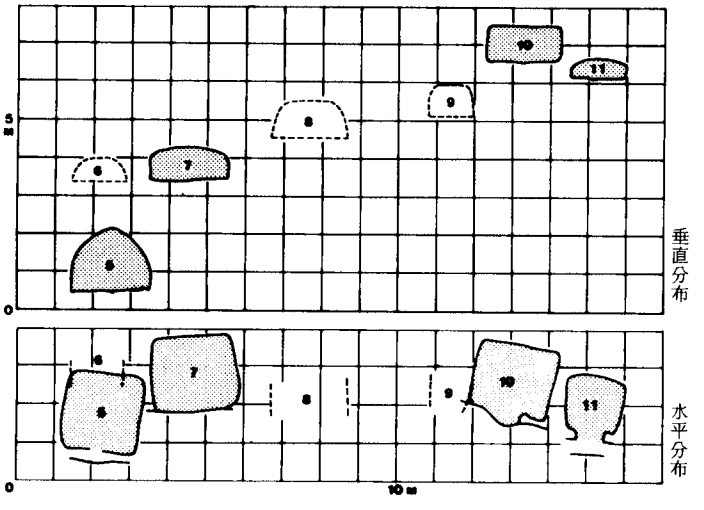
珠洲地域内浦側は奥能登有数の遺跡分布をみる。またこれら遺跡群のなかでも、極めて濃い分布密度を示す横穴群、須恵器系中世陶器として東北日本海域に広く流通する珠洲窯等は、当地の持つ地域性を顕示する代表的遺跡である。

当地の横穴分布は、地元研究者の長年にわたる踏査と、それにつづく市史編纂に伴う調査によって14群198基が確認され、観察可能な106基の計測が行われており、谷崎横穴群では４基が報告されている。[2] 一方、高塚古墳は本横穴群に近接する永禅寺古墳群（５～６基、５世紀末）[3]、春日野大畠古墳群（３基以上、７世紀）[3]を除いては、鈴内山岸古墳群（５世紀前半）の他、上戸地区に数群が確認されていたに過ぎなかったが、1982年に実施された県内古墳群分布調査事業（奥能登地域）によって、調査途中段階で50基を越える古墳が発見されており[4]、最終的にはこれを大きく上回るものとみられ、その成果が注目されている。

このように奥能登最大の古墳、横穴をみながらも、該期の集落遺跡に関しては十分には把握されていない。古墳時代後期の遺物が採集されているものは、熊谷羽黒遺跡、野々江妙珠寺遺跡、出田有政遺跡、上戸町山岸地内等砂丘地内側あるいは海岸平野部の数遺跡に過ぎない。[5] 本横穴群の造営集団の生産基盤である磐若川流域では、金峰寺、中野地区に帯状に拡がる微高地に立地する金峰寺すんどん遺跡が、縄文時代から平安時代に至る大規模な複合集落とみられ留意する必要がある。

3　分布状況

既開口の２～４号横穴の北東約50m、眼下に飯田湾が広がる南東崖面の中腹やや上位に７基がまとまって開口する。調査に際しては、４号横穴寄りから順次５～11号横穴と番号を付した。これら７基は、幅15m、高低差約６mの範囲に２段に造営されており、最下部の５号横穴は床面で標高約21mを測る。上段の11号横穴北側にはさらに横穴が連続することも十分考えられるものの、踏査に相当の危険を伴うためその把握には至っていない。一方１～４号横穴との間50mの区域に関しては、５号横穴側約20mの工事範囲には横穴の存在は認められないが、４号横穴側約30mの範囲には分布の可能性は高い。



第３図　谷崎５～11号横穴配置図

4．横穴各説　（第４図、図版５～８）

(1)　５号横穴

玄室床面はかろうじて全体が遺存するものの、玄室前壁から天井部中央にかけては崩落している。最近まで開口していたとみられ、壁面の風化剝落が目立ち、床面も一部攪乱を被っている。

玄室平面形は隅丸方形、立面形はアーチ形である。ただし奥壁は内傾しつつ滑らかに天井棟に移行し、奥壁と側壁（天井）との境も明瞭にせず丸く仕上げている。天井高は最大1.60ｍを測り、３号横穴とならび本群中最も高い。床面には中央主軸および周囲に排水溝が認められる。ただし周囲のものは不完全であって後世の造作とも考えられる。

出土遺物は僅少であって、流土中より須恵器杯蓋片１（第５図１）、瓶体部片１点が検出されたに過ぎない。

(2)　６号横穴

５号横穴の上方３ｍに位置する。玄室奥壁付近が残るのみであって、足場が悪く計測不可能であった。玄室内は流土が厚く堆積している。９号横穴とほぼ同規模、小型の横穴であって、奥壁上部は滑らかに天井に移行しており、奥壁上半分を見た限りではドーム形に近い印象を受ける。

(3)　７号横穴

崩落により玄室前壁を欠く。前壁側がやや広がり膨らんだ方形プランである。立面形は天井が低く扁平なアーチ形である。奥壁・側壁の境は稜をなすが、天井部へは各壁とも丸味をもって移行しており、境は不明瞭である。玄室床面には排水溝が一巡している。壁面調整は幅10数cmでU字形の刃先を持つ工具を使用している。

(4)　８号横穴

足場が悪く計測不可能。玄室内には流土が厚く堆積している。５、10号横穴と同規模とみられるが、玄室形態は不明である。

(5)　９号横穴

計測不能。玄室奥壁側約半分が遺存。流土の堆積が著しい。規模・構造ともに６号横穴と類似した小型の横穴である。

(6)　10号横穴

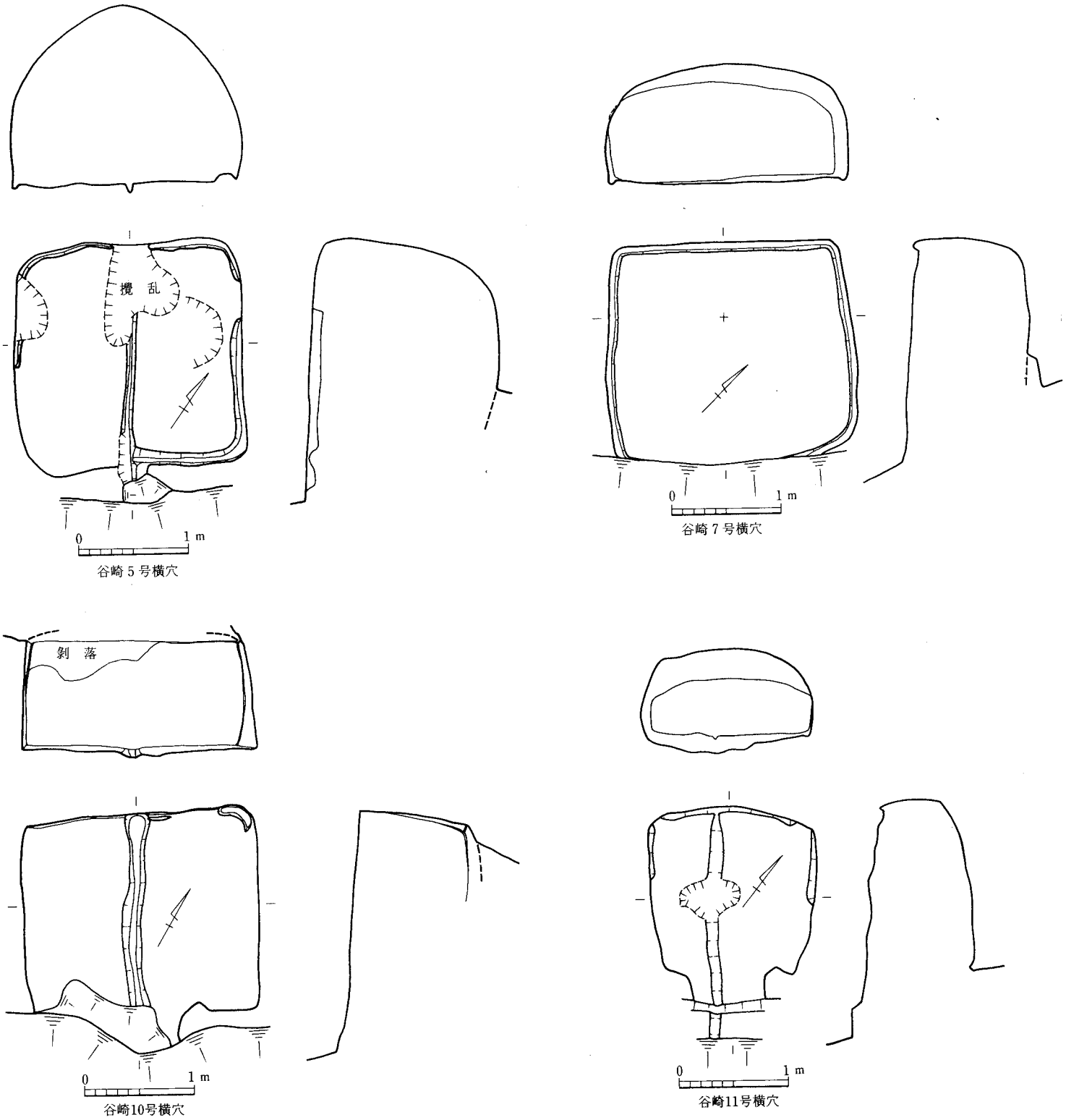
玄室前壁および天井部の大部分が崩落。遺存部の風化剝落は比較的少ない。玄室平面形はやや幅広の方形、立面形は奥壁、両側壁が直立した箱形をなす。奥壁の周縁、右側壁と天井部の境のうち奥壁寄り約40cmには、幅、深さとも２cm前後の掘り込みを施している。これらは壁面調整に用いた工具を使用しているために各所に工具痕を残しており、特に奥壁部では著しい。

床面には主軸に沿って幅15～20cm、深さ５cm弱の排水溝が走り、奥壁中央及び同右隅にも一部掘り込みが認められる。後者については意図的に中断したものか、後世の造作であるかは判別できない。

出土遺物は土師器杯片が前壁側流土中より検出された。（第５図４）

(7)　11号横穴

調査対象となった７基のうち唯一玄門部が遺存する。奥幅が最も広く、前壁に向かうにつれて



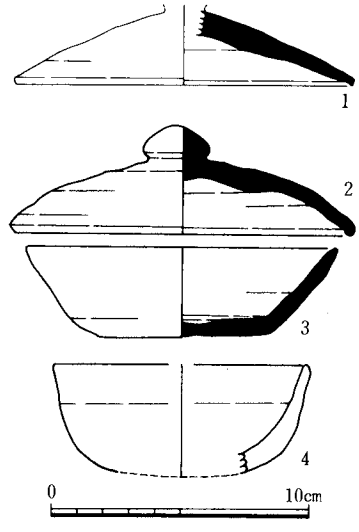
第 4 図　谷崎 5・7・10・11号横穴実測図

徐々に幅を狭めており、羽子板状の平面形をなす。本横穴は玄門付近を除き壁面の仕上げ調整がみられず、天井部を含めて壁面の凹凸が著しく各所に工具痕を残している。したがって各壁間の境や床面から壁への立ち上がりも極めて雑な造作となっている。立面形は、基本的にはアーチ形を意図し、低いながらも直立し他壁とは稜をもって区別される奥壁をもつ。床面には主軸方向、奥壁、両側壁の奥壁側約60cmに、V字状断面をもつ溝が穿たれている。玄門は床幅約60cm、高さ90cmを測り、中央部が膨らんだ長方形をなす。

(8)　出土遺物　（第5図、図版7）

1は5号横穴玄室流土中、4は10号横穴流土中より出土した。2・3は工事排土中より中野錬次郎氏が採集、保管しているものである。5号横穴出土の瓶体部片は細片のため掲載はしない。須恵器蓋1・2は口径13.0～13.5cm、口縁部は返り消失直後の形態を示し内外面ともに横ナデ調整で仕上げている。3は口径12cm、内外面とも横ナデ調整、底部外面も平滑である。全体に肉厚で重量感があり、胎土・色調が2に酷似することからおそらく共伴するものであろう。土師器杯4は細片のため、器形、口径を明らかにし得ない。

須恵器杯1～3は有返蓋と無返蓋が共伴する時期、7世紀後半でも末葉頃の所産と考えられる。



第5図　谷崎5～11号横穴出土遺物

5　おわりに

玄室構造については市史資料編で天井形、棟の形態、奥壁・前壁と天井壁の関係から、家形（I～V類）、アーチ形（I～V類）、ドーム形（I～III類）、箱形に形態分類がなされている。計測を行った5、7、10、11号横穴は11号横穴を除きいずれも前壁形態が不明という制約はあるものの、上記構造分類に明確に

第1表　谷崎横穴群玄室計測表

	主軸方位	玄室長	奥幅	中央幅	前幅	玄室面積	奥壁高	中央高	構造分類
1	未開口	——	——	——	——	——	——	——	——
2	N—22°—E	2.0(推)m	2.05m	2.20m	——	5.2 m²	1.05m	1.25 m	家形 V
3	N—14°—E	?	2.55	2.45	?	?	1.60	1.60	家形 II
4	N—10°—E	2.5(推)	2.20	2.45	?	?	——	1.40	アーチ形II′
5	N—37°—W	2.00	?(隅丸)	2.06	稜なし	4.0		1.60	アーチ形I′
6	計測不可	——	——	——	——	——	——	——	?(ア又はド)
7	N—47°—W	2.1(推)	2.00	2.28		4.6(推)		1.08	アーチ形II′
8	計測不可	——	——	——	——	——	——	——	?(ア又はド)
9	〃	——	——	——	——	——	——	——	?(ア又はド)
10	N—31°—W	1.80	1.90	2.14		3.9	0.96	1.2(推)	箱形
11	N—36°—W	1.50	1.42	1.48	1.2	2.1	0.52	0.86	アーチ形

注　1～4号は珠洲市史資料編による。玄室面積はプラニメーターで算出した。
　　ア：アーチ形　　ド：ドーム形　　推：推定

該当したものは箱形の10号横穴のみであった。5、7号横穴については、それぞれアーチ形I類、同II類に近い形態を呈するが、各分類の代表例とはやや様相を異にしている。すなわち、分類要素のうちかなりの比重をもつ奥壁幅と奥壁高の比率の点では上記類となるが、各壁面間あるいは天井との境界を区画する稜が不明瞭で玄室全体を丸みを持たせて仕上げていること、5号横穴奥壁上部の前傾および棟中央部の湾曲、7号横穴の直線的天井部縦断面に関しては該当形式の一般的傾向との差異が少なくない。このことは将来別形式として抽出する余地を残しつつも家形V類として唯一確認されている2号横穴、7号横穴と相似形をなすと考えられる4号横穴でも認められ、ドーム形的な印象を受ける。したがってこれらの点を谷崎横穴群の玄室構造の特徴として強調するならば、5号横穴はアーチ形I'類、7号横穴はII'類として抽出することも可能である。箱形とした10号横穴は奥壁周縁を巡る掘り込み、玄室規模とも岡田1号横穴と類似する。箱形は金川、若山川流域の横穴群で3例が確認されているに過ぎない。11号横穴は7号横穴の玄室形を意図したものと考えられる。

造営年代に関しては出土遺物が殆んどみられないため限定は難しい。第5図に示した資料はいずれも当地域における横穴の終焉期を示すものである。ただ本横穴群からは出土横穴不詳ながら隣接する春日野大畠1号墳出土品と同巧で7世紀前半とみられる台付子持長頸瓶(1)が出土し、岡田1号横穴でもほぼ同時期の杯が出土している(1)。したがって5～11号横穴は小型で粗雑な11号横穴を除き7世紀前半代の構築であろう。

本横穴群の玄室構造は未開口の1号を除き家形2基、アーチ形4、箱形1、不詳3となりアーチ形が主体をなす。また、3号横穴を除き、アーチ形、家形ともに先に示したとおり天井部がドーム的であることなど全般的に南黒丸・鵜島地域の横穴ブロック(6)と類似している。

最後に、本横穴群はその立地が、横穴造営と時期を同じくする春日野大畠古墳群（3基以上、横穴式石室含む）に近接し、同巧の台付子持長頸瓶が出土するなど、他の横穴群にはみられないあり方をしている。ただ今回の調査ではそれが横穴構造、群構成等の面に直接反映されているかは把握し得なかった。これは筆者の浅学によるところであり、今後の課題としたい。

注

(1)　『石川県の自然環境』第1分冊地形地質　1977　石川県

(2)　吉岡康暢・田嶋明人・河村好光・金沢大学考古学研究会「古墳文化」『石川県珠洲市史』第1巻　1976

(3)　田嶋明人「第1章第3節　古墳社会の形成」・「第1章第4節　横穴群の盛行と古墳社会の変質」『珠洲市史』第6巻　1980

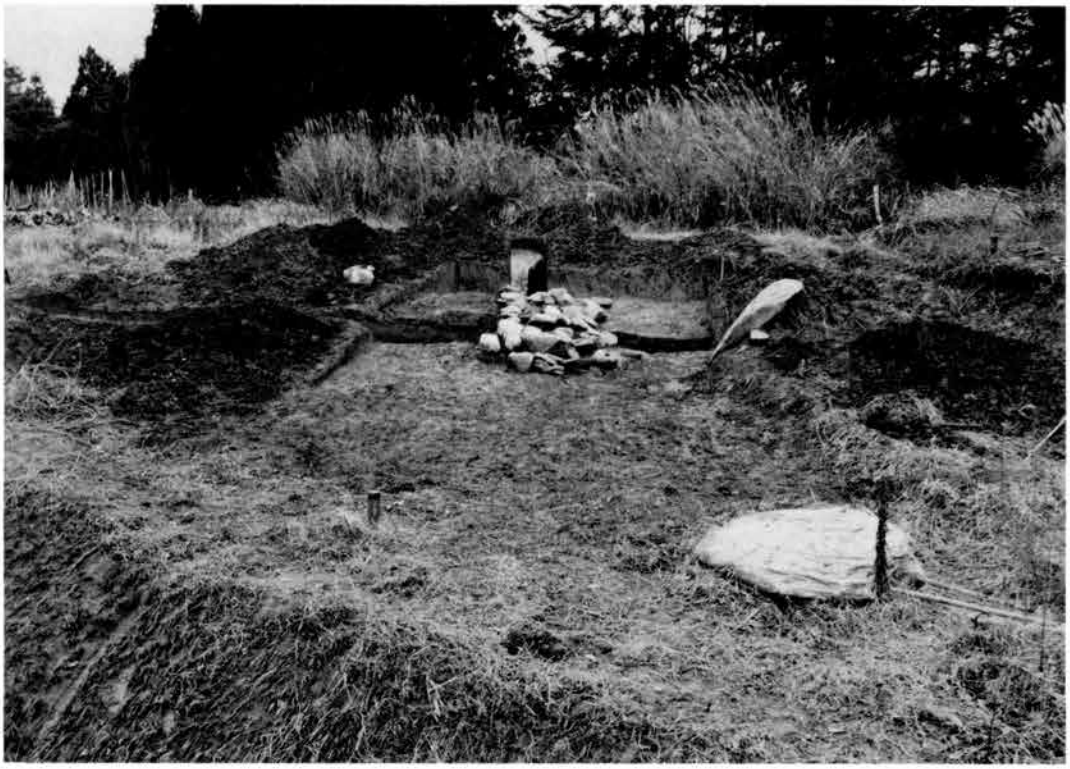
(4)　『石川考古』第142号 1982　石川考古学研究会

(5)　橋本澄夫「第3章第1節　珠洲市内の古代集落遺跡」『珠洲市史』第1巻　1976

(6)　田嶋明人「第2章第4節　珠洲地域の横穴群と構造」『珠洲市史』第1巻　1976

図版1　宮犬ゴショ山古墳

遠　　景



調査区全景（北より）

図版2　宮犬ゴショ山古墳

全　景（北より）

全　景（南より）

図版3　宮犬ゴショ山古墳

復元後の植栽

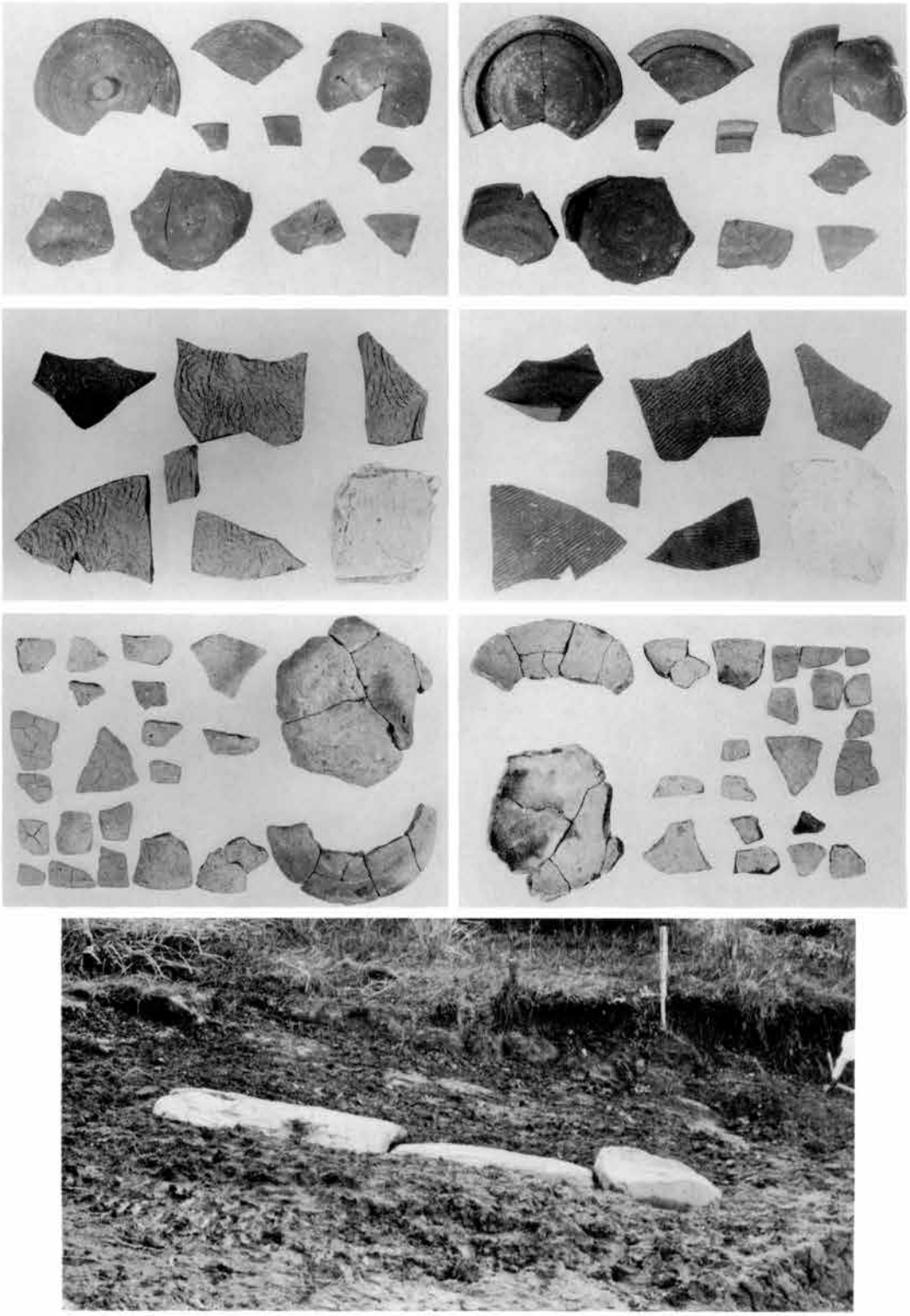
断ちわりの状況

遺物出土状態

調査風景

調査風景

図版4　宮犬ゴショ山古墳

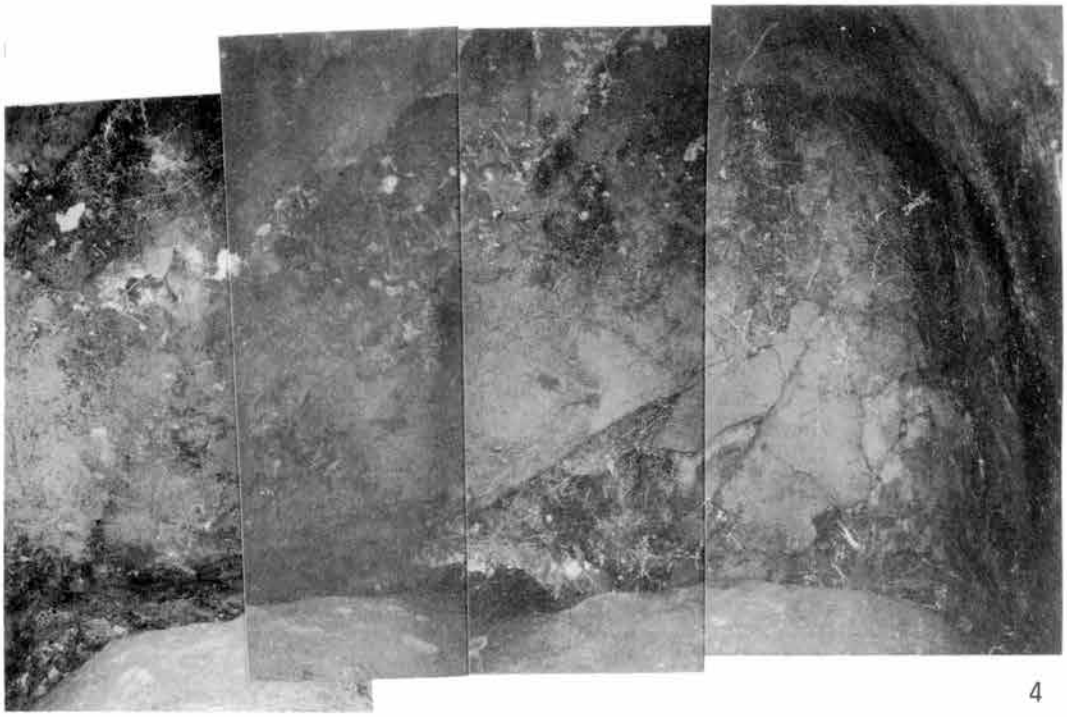


出土遺物と復元後近景

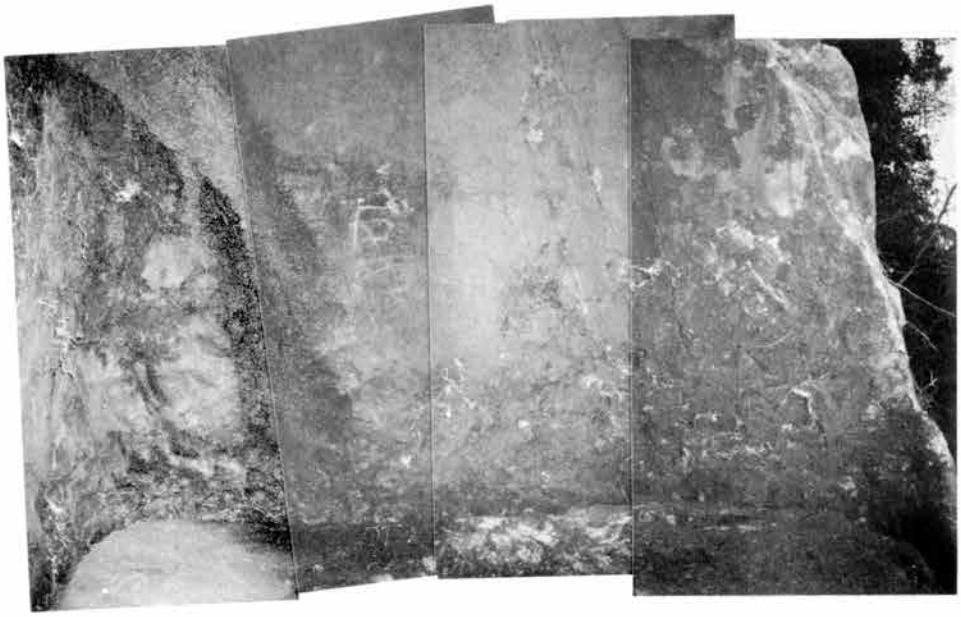
図版5　谷崎横穴群

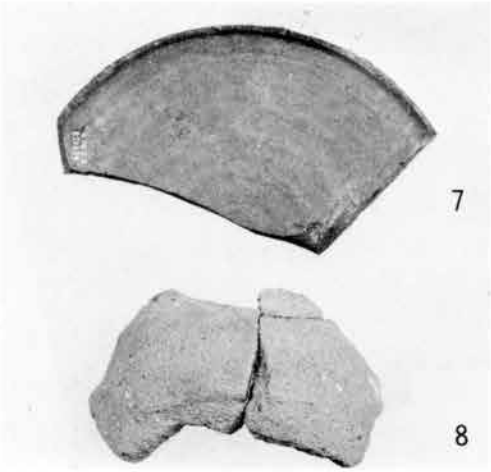
1　谷崎横穴群遠景（南より）
2　谷崎5～11号横穴調査風景

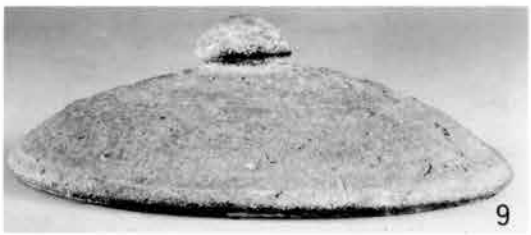
図版6　谷崎横穴群



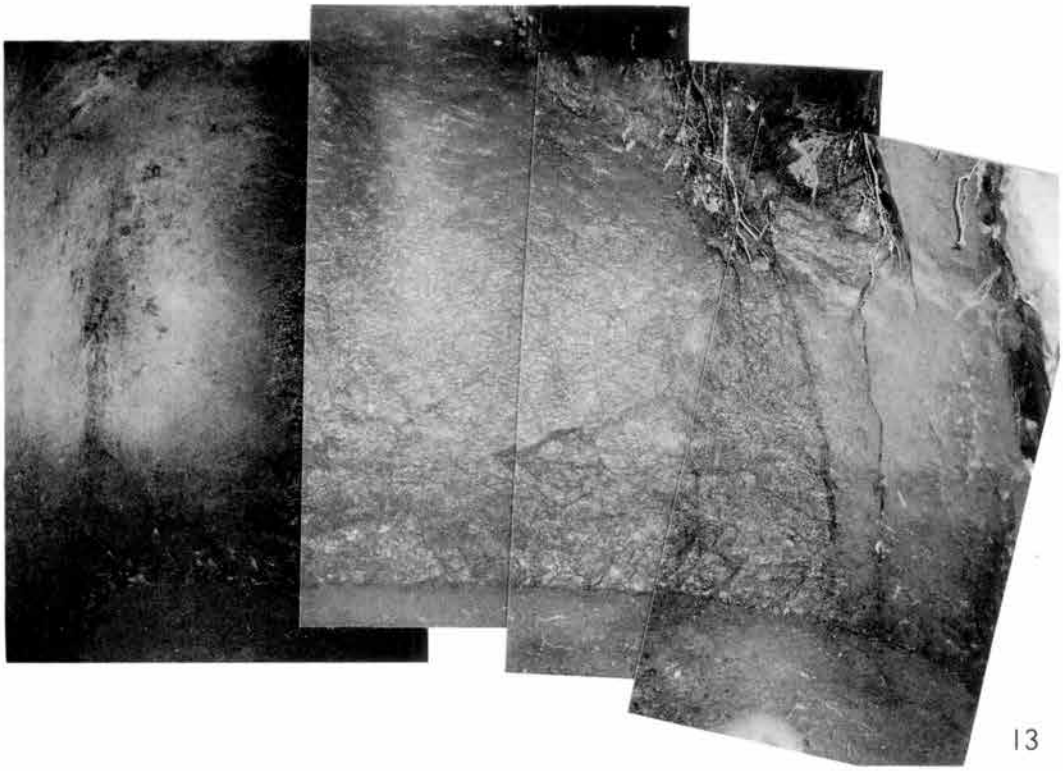
3　谷崎5～11号横穴近景
4　谷崎5号横穴玄室奥壁







5　谷崎5号横穴玄室右側壁
6　　同　　玄室前壁側排水溝
7　　同　　出土遺物
8　谷崎10号横穴出土遺物
9　谷崎5～11号横穴採集遺物
10　　同　　上



11　谷崎7号横穴玄室奥壁左隅
12　　同　　玄室奥壁右隅
13　谷崎7号横穴玄室右側壁